



TITLE:

<現場レポート2>「不登校・ひきこもりを考える親の会」を訪ねて

AUTHOR(S):

本誌編集委員

CITATION:

本誌編集委員. <現場レポート2>「不登校・ひきこもりを考える親の会」を訪ねて. 公共空間 2013, 11: 36-37

ISSUE DATE:

2013

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184875>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお断りいたします

【現場レポート②】

「不登校・ひきこもりを考える親の会」を訪ねて

本誌編集委員

今日の教育政策を語るとき、現場で発生している具体的な問題について触れないわけにはいかない。今回は、東山区「不登校・ひきこもりを考える親の会」シオンの家の代表大槻明美氏と世話人上坂秀喜氏にお話を伺い、十年以上にわたる活動を振り返ってもらうと共に、教育における家庭環境の重要性を語ってもらった。

■活動のきっかけ

東山区「不登校・ひきこもりを考える親の会」（以下「親の会」）は大槻氏と上坂氏を発起人として二〇〇一年より活動が続けているが、そのきっかけはそれぞれ子どもたちが同時期に不登校だったことだ。類似の組織は各都道府県にいくつか存在しており、二人も当初は既存の左京区の「親の会」に参加していた。そのうち自分達の心に少し余裕ができたこと、左京区まで通う手間や、自分たちの周囲にも同じような境遇で悩む親たちがいたことから、東山区で、自分自身の手で「親の会」作ってはどうかという

話が持ち上がった。活動を始めた動機の一つは自分たちも親の会に参加して、その意義については痛感していたためだ。上坂氏は語る。「まず、話を

して気持ちを分かってもらえたことの安堵感と、次に時系列と言いますか、未来が見えた点が安心できました。自分の子供は不登校になりたてで、これからどうなっていくのか分からないという部分があつたんです」。親の会に参加することで、二、三年後の明るい兆しを見ることができる。長い復帰のプロセスの中で、自分の子供がどの段階にあるのかを知ることができるのだ。

■「親の会」とは

実際の活動は、集まった者が互いの話を聞くことから始まる。子どもが学校に行っていないと、近所のスーパーに行くことすら辛い親もいる。不登校の子どもを持つ親は、自分と同じ立場の人でなければ、共感してもらえなかったという気持ちもある。「オブラート一枚隔てているような感覚だと思います」と上坂氏は言う。会の規則として、ここで話したことはよそで話さない、また誹謗中傷はしないというものがある。また、国や地方公共団体のような行政相談と違

い、実際に顔を合わせることがすることも強みである。「私たちは、一対一ではなく、同じ立場の親のつながりを築こうとするものなんです」。さらに、親の会は、パニックになり、視野が狭くなってしまうがちな親に対し、客観的な視点を与えることもできる。一人で子どもと向き合っていると、どうしても焦りが強くなっていく。外から見れば「前よりもずいぶん成長したじゃないか」と言えるが、距離が近すぎると子どもの些細な進歩にも気づけない。加えて、「親の悩みとして、まず勉強・受験のことがあります。実は通信制の学校など、選択肢は様々あるんです。親の会ではそのような情報を発信していくこともしています」と上坂氏は語る。

■学校現場との連携

活動当初は、学校との間に不登校に対する認識のギャップがあるように感じたという。そのような状況からも、親の気持ちに共感する場所が必要だった。親の会は、今では学校と毎年意見交換の機会を設けてもらっている。一方で学校の対応は、地域差、管理職のキャラクターやいじめ問題への熱心さというものに左右される。そのため年度が変わって管理職が変わると状況は二転三転してしまう、とのことだ。

しかし、活動開始から十年が経って、学校側

でも親の会への理解が進んできた。最近は学校の方も安心して学内での取り組みの様子を教えしてくれる。ただ、今でも場合によっては、警戒されてしまうこともある。「学校の不手際を糾弾したいわけでない」と大槻氏。オープンな話し合いのためにも、信頼関係が不可欠だ。

■親へのアプローチ

なぜ子どもではなく、親へのアプローチを重視するのか。そもそも不登校の子どもは外に出てこないで、現実には窓口が親しかない。加えて、二人は「子どもの第一の支援者は親である」とした上で、親の気持ちに子どもは敏感である」と指摘する。「親に元気がないと、その子どもも一層元気がなくなる。逆に親が明るく元気だと、子どもも自分が元気になるためのエネルギーを蓄えることができます」と大槻氏。上坂氏が続ける。「親がおおらかな気持ちで子どもの現状を受け入れること。家にいるのはお母さんが多いので、まずはお母さんに元気になってもらうことが大切なんです」。親との関係は人間関係の基礎。すぐに学校に行かせようとするのではなく、その時点での現状を受け入れるだけの信頼関係があれば、数年後、外に出ていく際に有効でもある。「親の会は温泉のようなのだとある先生が言っていました」と上坂氏。「例えば、早く再

登校して欲しいというような、親の焦りや下心、これがアカとなって身体にこびりつく、そのアカをゆったりと温かな温泉に浸かって落としていく。でも家に帰って子どもと暫く向き合うと、そんなアカが溜まってくる。そうしたら、また温泉に浸かればいいんです」。

■不登校の延長としてのひきこもり

不登校とひきこもりは、密接に関係している。「最近では行政の支援も充実してきました。しかし義務教育を卒業してしまうと、そのような支援が途絶えてしまう」と上坂氏は語る。不登校がそのままひきこもりになってしまうと、社会とのつながりがなくなってしまうという深刻な問題があるのだ。そのような、時には十年以上不登校・ひきこもりを続けてきた子どもにとつては、一層親へのアプローチが重要である。実際、長年の不登校・ひきこもりからいきなり就職するということは難しく、少しずつほぐしていくしかない。まずは一歩、自分の好きなことをやったり、行きたいところへ行ったりすることから始める。その時一番の助けになるのは、やはり親なのだ。

■今後の活動の展望について

親の気持ちをじっくり聴く場という姿勢は何

年経っても変わることはない、と二人は口を揃える。当初の活動理念を大切にしつつ、時代の変化に合わせてより積極的なアプローチも必要とされる。親の会では、昨年から、新たな試みとしてバザーを開催している。子どもと親に、チラシの作製や配布、また前日の準備や、当日店番をすることなどをお願いしている。この取り組みは完全なボランティアではなく、参加者には若干のお手伝い料や交通費が支給される。自分の活動が社会の役に立っているという意識を少しずつ持つてもらおうという工夫だ。

最後に上坂氏に学生へのメッセージの意味も込めて、今後の思いを聞いた。「十年前と今は状況が違います。今では子どもは皆オンラインゲームやSNSを活発に利用している。若い人たちの情報交換の機会を取り入れていきたい、勉強して行きたいと思います」。

■所感

体罰問題、いじめ問題等により風当たりは弱くはないが、復帰する場所としての学校は今後もネットワークの重要な位置を占め続けるだろう。その上で、家族が、地域が、最後の拠り所としての親が、どのように子どもを支えるのか。親の会の活動は試行錯誤を繰り返しながらも続いて行く。

(文責 山本剛)